「ロマ書」八章の自然観の受容と展開——内村鑑三とその後継者における自然の境位——

柴田　真希都

一　はじめに

本稿は、江戸末以降日本人がキリスト教と再接近し、自ら『聖書』を読むようになって出会うことになった『聖書』における自然観の特色ある受容の一脈を取り上げる。具体的にはパウロの「ローマの信徒への手紙」（以下「ロマ書」と表記）の八章に記された自然観が、日本においていかに読み取られたかに着目し、その際だった事例として、内村鑑三の読みと思索を整理する。さらに、彼の後継者ら（藤井武、三谷隆正、矢内原忠雄）において、その自然観がいかに受け継がれ、日本近代の歩みに刻まれていったのかを検討する。

本稿は研究盛んな学問諸領域にわずかに触れるに過ぎない一つの事例研究である。その領域には聖書学における『聖書』の自然観の問題ということがあろうし、キリスト教学における自然の神学や環境問題ということもあろう。[1][2] 本稿では発表媒体の性質を考慮して、それらへの接続は関連先行研究を指示するに留め、主として、日本近代の文芸・思想界を背景とする、一つの個性的な宗教的自然観の水脈を発掘することを主眼としたい。[3]

本稿が定位する「ロマ書」八章一八節から二七節の言葉を、内村によって提出された邦訳[4]（『羅馬書之研究』、一九二一—二二年における）によって掲げ、本論への導入とする。

（一八）我れ思ふに今の時の苦みは我等に顕はれん栄に比ぶべきにあらず。（一九）それ受造物の切望は神の諸子の顕はれんことを待てるなり。（二〇）それ受造物の虚空に帰らせられしは其願ふ所に非ず。即ち之を帰らせし者に因れり。（二一）また受造物みづから敗壊の奴たることを脱れ神の諸子の栄なる自由に入らんことを許されんとの望を有されたり。（二二）万の受造物は今に至るまで共に呻き共に労苦むことあるを我等は知る。（二三）たゞ之等のものゝみならず御霊の初の実をもてる我等も自ら心の中に呻きて子とならんこと即ち我等の身体の救はれんことを俟つ。（二四）我等が救を得るは望によれり、されど望を見ば亦望なし、既に見る所の者はいかで尚ほ之を望まんや。（二五）もし我ら未だ見ざる者を望まば忍びて之を待つべし。（二六）聖霊も亦我等の荏弱を助く、我等は祈るべき所を知らざれども聖霊自から言ひがたき呻きを以て我等のために祈る。（二七）人の心を察給ふ者は聖霊の意をも知れり、そは（聖霊は）神の心に従ひて聖徒のために祈れば也（執成せば也）。[5]

二　内村鑑三（一八六一―一九三〇）の飛躍
――終末論的開眼

内村鑑三の自然観に新しい局面をもたらした出来事として、主に私的・公的の二つの出来事が指摘される。一つは娘ルツの病死（一九一二年）であり、もう一つはキリスト教国といわれる国々が争った第一次世界大戦の勃発とアメリカの参戦である。一つ目の出来事は内村の志向をより他界的なものとし、復活や天国といった事柄を身に親しいものへと変化させた。そのような境地においてほどなく起こった世界大戦とアメリカの参戦は、内村に多国間協調による国際平和への期待を失わせた。人々の連帯を神と人との和解に基礎づける『聖書』の教えは、内村にその記事を終末論的に読み解く視点を真実なものだと認めさせた。それが彼を一年強にわたる基督再臨講演（一九一八―一九年）に導くのである。その再臨講演時代に彼の自然観の飛躍は自覚され、反省的に披露されたのであった。

この自然観の飛躍は主に「ロマ書」八章一八節以下の言葉に依拠してなされたといってよい。内村は「基督再臨を信ずるより来りし余の思想上の変化」（一九一八年）という文章において「再臨が解つて余は天然が解つた、余は今日まで天然を愛して実は之を賤めたのである」[6]と述べている。

先に挙げた箇所で「受造物」と訳された語（ギリシャ語のktisis）を内村は人類抜きの「天然」（内村の用語で現代日本語「自然」とほぼ同義）と解釈したのである。[7] そこで彼が「ロマ書」八章から得た自然観の構成は次のように整理されうる。[8]

①霊だけではなく、それにふさわしい新たな身体の賦与により人の救済は完成する。②人の救済の完成はそれに伴う新しい天地万物の完成とともに行われる。③自然界は神の子の栄の自由に入ることを待ち望みながら、現状は死滅に至る虚無と不自由の中にある。④人と自然は新しい万物に生まれかわるその時（目的、telos）を、生みの苦しみの中、呻きながら待ち望んでいる。⑤それゆえ、人と自然とは切っても切れない関係にあり、両者は救済史における希望の運命共同体である。⑥キリストの十字架は単に罪人を救うだけの目的ではなく、自然物も救い、天地万物を新たに完成させるためのものであった。

以上の物語を「ロマ書」八章一八節以下に見出した内村は、この自然観と救済観をもって「信仰も茲に至て其絶頂に達する」と宣言したのである。[9] この文脈に沿った自然理解は、大手町で七〇〇人超の聴衆を前になされた「羅馬書講演」（一九二一―二二年）において「三つの呻き」という主題に発展する。[10] それは救済の完成を求めて呻く神の子たち、人が神の子として完成することによって自らの自由を回復したく呻く自然、そしてそれら二者の呻きを神に執りなす祈り＝呻きを発する聖霊、という三者が登場する壮大なビジョンへの結実であった。内村はその日の日記で、十字架を説くのが不十分になったことを反省するほど、[11] 自然も共に救われるというその通知にのめり込んでいたのである。

この「ロマ書」八章を拠点に、内村はその自然観を『聖書』の各所と接続していく。それは宇宙救済の史脈を『聖書』中より浮き彫りにしていく作業であった。彼が「ロマ書」八章の自然観と架橋した『聖書』の箇所には、荒廃した自然の復興を預言する「イザヤ書」三五章、[12] 人の堕罪に連座した地の呪いを告げる「創世記」三章一七・八節、[13] 万物の栄化の様を描写した「ヨハネの黙示録」二一、二二章[14]などがある。その中でも内村においては、自然界の救いの保証も、救済史の要である十字架のイエスの血に直結するものと指示されたことに留意したい。そこでは「コロサイ書」一章二〇節の言葉「其十字架の血に由りて平和をなし、万物即ち地上に在る者天に在る者をして彼に由りて己れに和がしむる事は是れその聖旨に適ふ事なり」が一つの根拠となっている。[15] 内村によって描かれた宇宙救済のビジョンの基底には、十字架のイエスの贖罪の血が流し込まれてい

るのである。

このように、内村において信仰の絶頂とみなされた境地が、人と自然の完全な、同時的な救済の歴史に見出されたことが重要である。ここには彼が、眼で見て手で触れられる身体的な様態にこだわったこと、さらには自然界が人と共に救われるという教えに釘づけにされるほど、自然が彼にとって近しいものであったことなどが窺われる。そのこだわりや近しさが、「ロマ書」八章一八節以下への彼特有の熱線を形成する一因であったとすれば、従来、彼がどのように、眼で見て手で触れられる自然界に関わってきたのかを確認することが必要だろう。以下では「ロマ書」八章に沈潜することにより飛躍を遂げた後期内村の自然観に、従来の自然への関わり方がいかに引き継がれていったのかを考察していきたい。

三　「ロマ書」的自然観を受容する前段階としての自然体験

1　感性的愛着の対象としての自然

内村の自然理解を考える際、生涯を通じてどこでいかに自然と関わってきたのかを確認することは有益である。[16] 彼は上州高崎に生まれ、幼い頃より勉学よりも魚釣りを好む傾向を発揮していた。札幌農学校へ入学した後も、その周辺の原野における自然との交わりを楽しんだ。一方、彼は東京英語学校や札幌農学校における英語文化を通じて、ワーズワース、コールリッヂ、エマソン、ブライアント、ロングフェローなど英米の自然を謳う文学（主にロマン主義的色調の濃い韻文）に親しんだ。これら文学は実際に自然のただ中で諳んじられることによって、その精神が内村の身体に新たに独自に経験されていったとみられる。彼においては、この幼少から青年にかけての豊かな自然の中での生活経験と、教育過程で出会った英米の詩人たちの、自然を通して跳躍する自由な精神の追体験が相互に響きあい、一つの強固な感性的愛着の対象としての自然像が抱かれていたといってよい。

この自然に対する愛着は、かの詩人たちを育んだ一つの風土、ニュー・イングランドでの暮らしによって、より増幅されたとみえる。内村のアメリカ留学（一八七四―七八年）は破婚や将来への迷いなどを契機とした、精神的な圧迫の強い時になされたものであったが、それゆえに彼は心惑う時、広大な自然のただ中で祈り、神との対話を試みた。彼は自然を通じて心整えられ、進路への決断をなしたのである。彼は激動の青年期を経た後、『聖書』の研究に自分の天職を見出し、その事業を軌道に乗せてからも、角筈、柏木といった自然豊かな地に居を定めている。夏は長野県

の沓掛に移動し、自然の中で散策と思索を繰り返していた。彼が『聖書』の研究と並行して、自然を謳歌したホイットマンやソローを愛読し、霊性の涵養に資するものとして広く衆人に紹介したことも考慮すべきことであろう。[17]

2　科学的観察の対象としての自然

自然を全体として愛着の対象としていた内村において、それをただ自らの感性に訴えてくる美的対象に留めなかったのは、彼において体得された科学者としての姿勢である。彼はキリスト教に出会った同じ札幌で、自然科学者としての思考法や対象との距離の計り方、自然の切り取り方を学んでいる。彼の専攻した分野は農学、生物学、博物学、魚類学、水産学などと呼ばれる範囲にあったが、それらが推論や数理解析に傾斜しない、生活に密着した性質を備えていたことが重要であろう。それにより彼は、実験室での解析に加え、自然の只中にもぐりこみ、とくに人々が実際に自然と交わるその生業の場に定位して、人生と不即不離の自然をこそ科学的に記述することを業としたのである。彼の専攻した科学が、こういった人と自然の交渉の中に立ちあがる生活の科学であったことが、内村において自然を通して人を見、人を通して自然を見させる一つの態度に寄与したといえるだろう。

そこでは、近代の高度化された科学の実験現場ほどには、数理的な操作が没人格的な性質を強く発揮しないためか、自然を人の世界に共在する者として見据える視座がついに覆い隠されることはない。それゆえ、彼は顕微鏡の対象の向こうに人格なる神を礼拝することも容易であった。[18]これは、彼がアメリカ留学中に医学という人を対象とする科学を神に仕える道として将来の選択肢に入れたこと、さらには後年の聖書研究の記述性が、実証性と文学性のあいだの微妙な境位に成立したものであることとも相通じる精神であろう。

こうした視点の取り方の可動性や境界性は、彼の後続となった多くの信仰者兼科学者、または彼を離れた文学者らにおいても、その叙述対象への向き合い方に大いに影響を与えたと見られる。[19]自然を対象化して距離をとり、分析するというこの態度を得ることにより、内村においては、自然現象に自己意識を投影させることや、自然の心が自己の心と融解するといった自覚、すなわち自然との合一への志向の稀薄化が進んだことが推測される。

3　人の生を脅かすものとしての自然

以上述べたところによれば、自然は内村の感性に親しく、さらには神の真理を解読するのに有効な法則性を秘めたも

のとして、手放しで高い評価を得ていたようである。ところが、彼にとって自然が人の生を脅かすものとして現れる画期があった。それが先にも挙げた娘の病と死である。内村は娘の死後まもなく発表した「二ツの神」（一九一二年）という文章において、それまでの自然観を覆すかのように、自然を醜さと結び付けている。

眼に見ゆる天然の神は是れ真の神ではない、天然は神の顔貌である、而して其心ではないのである、神は偉人である、其の顔貌は醜くある、然し其心は其顔貌とは正反対に優さしくある、神を解するは偉人を解するが如く難くある、其心と顔とが正反対であるからである、而して其醜き顔に於て其美はしき心を認むる、是を信仰と称する[20]

ここで内村は自然が神の顔であり、その顔は醜い相貌をもっていて人をつまずかせる、それゆえ、自然の奥深くに秘められた神の心を読むことが必要であると述べている。自然の醜さとは、人にとって拒否したい性質をもつ自然の苛酷な側面を指す。それは神の真の心へと近づくための人にとっての試練となり、やがて神へと至る否定的契機になるという。

天然の神を真の神と思ふ、其れが迷信である、人生すべての誤謬と之に伴ふすべての不幸とは此迷信より来るのである、而して見ゆる天然を排して見えざる真の神を認め得て、我等は真理に達し得たのである、神は天然といふ醜き顔を以て現はれ給ひて人の心を試し給ふのである（中略）見ゆる所に憑らず見えざる所に憑りて神を認めて、己が信仰を確実にし、其霊魂の救拯を全成うすることが出来るのである、二ツの神はやはり一ツである、深き矛盾を以て深き自己を顕はし給ふ讃むべき尊むべき一ツの神である[21]。

見える神の醜顔（自然）を排して、見えないところに神を認めよと告げた内村は、その二つの世界に神を分断したままにはしておかない。「深き矛盾を以て深き自己を顕はし給ふ」この神は、見えない世界より見える世界に確かに関わる神として実感されているのである。

娘の病と死が、自然を通した神からの試練であることを自覚した内村は、自然への関心を決して失ったわけではなかった。彼は自然の顕れが人間にとって脅威になり、苦難をもたらすという事実に直面しながら、その顕れの向こうにこそ秘められた神の心が知られるという理解に至っている。自然に対する一義的な、感性的愛着を失っているようでありながら、実はより深みにおいて自然の秘められた意義を見出す試みがなされていたのである。

4　後期内村にみる自然観と神へと至る道

以上のような内村の歩みは、「ロマ書」八章の自然観を読む前提として、自然を神へと至る道にいかに位置づけるかという問いを生む。若き内村は自然を通して神を賛美し、自然を謳う詩人たちに倣い、自然との交わりを神へと至る道としても実践してきたといってよい。それは日本においてもアメリカにおいても、歓喜においても憂愁においてもそうであった。ところが、娘を病死させた苛酷な自然の局面は、内村において神の深い心と表向きの自然法則を一度切り離させることになる。そして人の救いのための神の秘められた心が、自然において顕れる摂理とは違うところにあることを知らされたのである。

彼は娘の死の直前にも「ロマ書」八章一八節以下を熱意をもって解読した。そこにはかつて、自然の中に神の摂理を探った喜びとは違う喜びがあった。[22] それは、苦難する人に並び立つ他者としての、苦難する自然を見出した喜びである。そして、人と自然が聖霊の視点において、救済史上で堅く結びあわされているという通知により、自然との親和協同の事実を新たに確信した喜びである。それは、内村が科学によって自然を対象化することを覚えたかつての経験や、死をもたらす自然の脅威に立ち向かい、一度自然から感性的に断たれた経験の上で初めて実感されるところの、自然との和解の喜びなのであった。

自然の脅威に打ちひしがれた内村はかつてのように〈自然を通して神へ〉という境地を謳歌するばかりではなくなった。しかし救済史という見えない物語においては、自然と人とが新たな関係を結びつつあること、その関係が終末の極致で目に見える形となって顕れることが示された。その通知は彼の喪失を糧にして、内村の自然へのまなざしを終末論的なものに定位させたのである。よって、晩年の内村が次のように自然界の現状を厳しく突き放して見たとしても、それを単純に自然への憎悪や呪いのように読んではならない。

信州浅間山の南麓沓掛に在る。（中略）外より観た天然は実に美くしくある。然し少しく其裏を窺へば惨憺たる状の実に堪へ難きものがある。殊に昆虫界の生存競争と来たらば見るに忍びざる者が多い。蜘蛛、蟻、虻、蜂、蛾、蝶、蜻蛉、其他種々様々の虫類が互に相欺き、相殺し、相食むの状は実に地獄其物である。善美どころではない、醜悪の極である。そして人間社会も多く之に異らないと思ふ。（中略）如斯くにして天然は決して人類の善き教師でない。我等は天然に学ばずして神に学ばねばならぬ。[23]

ここで内村は、人が自然より倫理的指針を学びとるべき

ではないことを告げているが、それは自然をおとしめたり呪ったりしたのではない。自然ではなく神からこそ倫理はやってくると言ったのである。内村は自然の惨状から人間社会の荒廃をも等しく感知している。人間社会も自然界も、等しく未完成の宇宙の一部であり、そこに住む自然物も人も未だ救済が完成していない呻き待ち望む存在として、共に終末論的境位に見出されたのである。

このような思考の推移は、自然が救済史においては、人と同じく神に向かう独立の他者であると認識されることに根を持つ。自然は美しいが、よく目を凝らせば惨憺たる様を呈しているという告知には、「ロマ書」八章より得た自然の虚無と不完全という思想が響いている。そこでは自然が低められるのは人が低められるのと等しいのであり、聖霊が人と自然を合わせた宇宙の復興を、低いところから高いところへ執り成すことに等しいのである。

それゆえ、人の救済へのまなざしは自然を通してまず神へ向かい、神を経由することによって自然が慮られる。ここに、人と自然の自由で完全な交わりを待ち望むという意味での共在の思想が編まれてくる。そこでは、ただ自然を讃美したりその威容を驚嘆・崇拝したりするのとは異なり、現状における自然の脅威や、自然それ自体がはらむ闘争と滅びの局面をも冷徹に見据えられている。この共在の思想を基礎づけたのは、自然と人との不可見の関わりを底に秘めた、コスモロジーとしてのキリストの救済史の信受であった。

四　「ロマ書」八章における自然救済思想の継承と展開

内村により展開された「ロマ書」八章の自然像は、長短の違いこそあれ、彼の後半生で何度か公にされている。多くの人に強い印象を与えたであろうこの救済の宇宙的構図が、彼の著作の代表的読者であった弟子たちにいかなる形で継承されていったのかを確認したい。本稿ではその自然観の個性的であることを考慮して、藤井武、三谷隆正、矢内原忠雄の三人を取り上げ、各人における「ロマ書」的自然観の継承と展開の様相を跡づけていく。

1　継承の思想史的背景

――明治末から大正期にかけての知的青年文化と自然

個々の思想を探る前に、彼ら内村よりも一世代後の知的青年達が担った文化と、そこに根付く自然観、自然への関わり方の一般的な様相を整理する。[24] それにより、彼らが内村に出会い「ロマ書」的自然観に直面したその出来事の意味が看取されるからである。

藤井や矢内原の青年期の文章を見ると、彼らがいかに当時の思潮と関わってきたのかが知られる。[25] 彼らの自然観を養う読書環境には清沢満之、多田鼎、綱島梁川、国木田独歩、夏目漱石、徳富蘇峰、徳富蘆花などの名前・著作が散見される。またそれら日本の著作家以上にワーズワースやテニソン、エマソンやゲーテなど欧米の詩人が良く読まれている。

これら後続の世代と内村との教養の違いは、後者ではなく前者にある。すなわち内村の読書体験はほぼ欧米（とくに英米）のそれであったのに比べ、後継世代では内村も含め、明治の言論界を率いた邦人の著作も良く読まれていた。それにより彼らは日本近代の言語表現や思索の典型を同時代人として経験的に体得していったとみられる。そこでは必然、自然観や自然との交わりの様式も、知的青年層に共有された一つの文化的背景にある程度規定されることになる。内村個人の教育過程ではそれほど重視されなかった漢詩文の素養が、彼ら後続の知的青年達の時代には、依然その精神形成と文章技法に基本的な素地を提供したことも忘れてはならない。[26] 以上のような知的情的環境における、青年達の自然観や自然との関わりの仕方を検討すれば、以下のような典型が浮かび上がるだろう。

①鉄道や徒歩での山野・名勝地への遠足、そこで出会う自然への驚異とその美の謳歌

②自然の中での率直な語らいと告白、それを経ることによる濃密な友情関係の形成

③自然との、互いの「生命（いのち）」を意識した交流の試み

④自然において大いなる精神的実在者を直覚しようとする試み

以上の点は多かれ少なかれ、内村の後継者が経てきた道にもある。しかしながらその個性的境遇や経験によって生まれた「多かれ少なかれ」の実態は多様であり、その多様さが個々の「ロマ書」的自然観の受容と表出に、独自の色合いを添えていることに注目したい。

2　藤井武（一八八八―一九三〇）

藤井武は内村の後継者としてはとりわけ自然にこだわり発言していった人として記憶される。彼の短い生涯に残した自然にまつわる多くの文章が『藤井武全集』第四巻（一九三二年）においてまとめて編纂されている。[27] この全集の編集を担った矢内原忠雄は、藤井にとって自然がいかに特異な、不可欠な存在であるのかをよく理解していたのである。

その藤井の「ロマ書」八章の自然観への着目が尋常でな

かったのは言うまでもない。彼は内村が終末論的見地に定位して、「ロマ書」八章における自然救済についてまとまった文章を発表したすぐ後の一九一九年に、それと呼応するかのような文章を『聖書之研究』に立て続けに発表した（「万物の賜与と天地の解放」『聖書之研究』第二二二号、「新天新地の出現」同、二三三号など）。さらに翌年、雑誌『旧約と新約』を創刊した際には、創刊号へ「自然論」と題した「ロマ書」八章一九節から二二節までの意を尽くした研究を発表した。[28] ここに、藤井が内村を経て自身の思想と化した、「ロマ書」を基点とする聖書的自然観の独自な展開が見られる。これがいかなる論考であったのかは藤井による摘要を左に掲げる。

パウロは自然の感受性を有せざりしか—愛と信仰とに基く自然観察—自然と人との連帯関係—詛はれた土—大自然の衷心の声—虚無の中に希望あり—束縛より自由へ、滅亡より光栄へ—万物の復興と神の子の光栄—自然は人を慕ふ—希望的宇宙観[29]

藤井は内村の基督再臨講演については大いに共鳴していたが、この時はまだ、イエスの十字架の出来事を人類の罪の贖いと受けとる、いわゆる代贖信仰を受け入れていなかった。それゆえ内村がその繋がりを重視したように、イエスの十字架上での贖いの死と復活を自然の救いに接続することはしていない。結果、全体の調子としては自然に対する藤井の熱愛と、その自然物が人間と共に堕落し、人間とともに復興するという終末の時の待望、その終末に至るまでの人と自然の連帯性に強意が置かれることになった。

ところで、藤井には内村には顕著でなかった思想的素地があった。その一つは自然を意識、心情において我と連続なものと捉える自然との一体化の思想であり、さらには自然の隅々にまで神の内在を認める汎在神論である。[30] 藤井の学生時代の日記を繙けば、そこに青年期に心酔した綱島梁川や清沢満之らの精神主義の影響を指摘するのは難くない。自然をめぐる藤井の一面は『善の研究』（一九一一年）の西田幾多郎のそれと遠くはないともいえる。藤井はこういった自然との意識における融合、主客未分化といった側面を保持しながら、一面、内村によって見出された救済史上の協同者としての自然、人の堕罪の余波を被って今や虚無に服する他者としての自然を、厚い同情をもって描きだしたのである。

その彼においては、自然を「彼女」と呼んで、自らの伴侶のように認める同伴思想に最も個性的発露を見る。[31] 自然は一方で他者であり、見る—見られる関係の対象であるのだが、他方で運命共同体として人と不即不離の関係にあるというのだから、自然を人並み以上に愛する藤井が、これ

を最愛の伴侶のように表象するのも無理はない。彼が武蔵野の野道を歩きながら自然と交感し、[32] 神の声を何度も聴いたと述べるほどの自然神秘主義の体現者でありながら、[33] 一方で内村に学びつつ自然の秘められた心を『聖書』を手がかりに探り出そうとしたのは稀有なことであった。なぜなら、梁川などに顕著なように、当時東西の神秘思想に共感を覚えた日本のキリスト教内外の論者は、『聖書』の終末論的言辞を客観的・将来的なものとは読まずに、それを内面化・現在化する傾向にあったからである。

藤井は自然の神秘を内在的超越の感性によって謳歌する一方で、未だならぬ万物救済の完成をまなざして、太古から続く自然の呻きに愛をもって応答した。それは、彼が梁川らに学んだ自由な神秘の探究心と、内村に学んだ『聖書』に基づく宇宙救済史観を共に大切に育み、それらを総合したかに見えるところに造り上げた自然愛の結晶なのであった。

3　三谷隆正（一八八九―一九四四）

藤井が学生時代より梁川に心酔し、梁川のことを内村に弁護していたのを横目に、三谷は梁川の著作には興味を持てなかったと述べる。[34] 彼は梁川の「実践的な世界を超脱しきった」様子に馴染めず、藤井を梁川に近い「純粋で受身な或る立場」の持ち主であったとみている。しかし記録によれば、三谷も一時、「贖罪の事実よりも不変的救済の信仰」を重視し、実践よりも冥想を好む汎神論的境地に立っていた。その彼も、闘病を契機に、一躍して贖罪信仰を確立し、冥想を排して実践を説く境地へ転換を遂げたと見られる。[35]

三谷は法科大学を卒業後、岡山の第六高等学校に務めていたので、直接内村の再臨講演や大手町での「羅馬書講演」を聴くことはなかったと推測される。しかしながら彼も『聖書之研究』の連載記事を通じて、内村によって壮大なビジョンにまで展開された、自然界の秘められた真の姿を独自に描き出す感性を養っていた形跡がある。

三谷は内村が晩年発行した月刊の英文雑誌 *Japan Christian Intelligencer*（一九二六―二八年）の常連寄稿者であった。そこに寄稿された彼の文章 "A COSMIC PRAYER"[36]（一九二七年三月）に、彼の『ロマ書』八章の自然観の受容と継承の様相が見出される。

この文章の展開は次の通りである。ある夏の夜、三谷が友人たちともった祈りの会から帰る道、澄んだ月の下で田圃の中を歩きながら思索にふけっていると、突然「壮大この上ない活気溢れる」蛙の大合唱にはっと心づいた。その蛙の大合唱は耳を聾するばかりであったため、かえってそ

れまで気がつかずにいたのである。三谷はこの蛙の声に気づいた時、言い表しがたい「畏れと畏敬の念」に襲われ、帽子を手に取り眼を閉じて祈った。その際「蛙のみならず、月も星も、山も田も、万有が私と一つ祈に和した」と理解された。その時三谷にあの「ロマ書」八章一九節の言葉「それ造られしものは切に慕ひて神の子たちの現はれんことを待つ」が浮かんできたのである。

三谷はこの言葉を手に取り、自然の活動の一つ一つに生きた生命の発露を認め、その生命に特殊な使命が与えられていることを信じた。宇宙の創造には深い意義があり、生物無生物に関わらず、そのものの存在が目指す不変の目的があるに違いないと思われた。そして、その目的が明確に意識された時にこそ、「そのものの祈り」が生まれるのだと理解する。

三谷は、その祈りが意識的でない場合は「内在的喘ぎ求め」になって発露するという。これは内村が強調した「天然の呻き」という概念と共鳴する。彼はそのような祈りは植物にもあるといい、その主体の意識の有無をついには問題としないのである。全宇宙の生物無生物は各々自らの立場より祈る（喘ぎ求める）のであり、その祈りの集積は「宇宙の交響楽」となって彼の眼前に響きわたっている。その楽の主調こそ「ロマ書」八章一九節「それ造られしものは切に慕ひて神の子たちの現はれんことを待つ」なのである。

この「宇宙の交響楽」のビジョンを得て以来、三谷にとって「宇宙は祈より成る有機体である」という観念が好んで抱かれる思想になったという。彼は結論部で、祈りは神から植えつけられたものであり、もはや神それ自身の熱い祈りであると述べる。「人は神と共に祈る」のでその祈りは確かに「彼」の聞く所となるのである。この見通しは、内村が「ロマ書」八章二六・七節から展開した、聖霊のとりなしの祈り（呻き）にひびきあうといえる。

三谷は、ふと自然の活気に触れた時、あの「ロマ書」八章の自然観に捉えられて、内村のそれと重なるかのような宇宙的壮大さをもつ祈りの共同体の構図を描いていた。彼において顕著なのは、生物無生物を問わず、意識無意識を問わず、呻きという形をとった祈りは、それ自身の生の根拠である個性的な目的を目指すものであるという、自然物の個性と主体性を重視する思想である。その各主体の個性的発露である祈りが一つ宇宙に和した時、そこに展開する和声はある一つの目的（神の子たちの現れんこと）を明らかにさせるのであった。ここには非常に深いところにおける内村からの思想継承が見られるとともに、明治・大正の個人主義を経験しつつも、共同体という単位をただ個人の集積とは見なさず、神的な賜物と捉えて重視した三谷の公共・

歴史哲学の資質をも確認することができる。[37]

4　矢内原忠雄（一八九三―一九六一）

矢内原忠雄は、その戦前戦後の社会的境遇において、内村の遺した精神を携えながら、時代精神と最も格闘した一人であった。[38] 彼は一九一一年に内村の聖書研究会に入ったが、それ以前も先輩から贈られる本を通じて内村の著作に親しんでいた。彼の日記を見ると、彼がいかに自己の罪の問題に苦しみ、また自己の罪を感じないことに苦しんだのかがわかる。その罪意識を育んだのは、自己反省と内面の率直な吐露を基調とする同時代の知的青年文化であり、それを一高校長・新渡戸稲造の説く「社交性」が後押しした。彼は事あれば一高の運動場に出て月を眺め、友人たちと夜遅くまで語りあうか、共に祈りをささげるかし、独りの時は月を見上げてその皓皓とした明かりが醸しだす霊的雰囲気に酔った。

矢内原にとってこの「月下の運動場」が、彼を神へと導く自然の装置であったことは強調されるべきである。これは内村における札幌の原野での体験や、ニュー・イングランドの壮大な自然を通しての神との対峙の経験と境位が近く思われる。内村にとっても矢内原にとっても、そして既に検討してきた藤井や三谷にとっても、自然の只中で、自然を通して神へと近づこうとする傾向は初期無教会の人々において際立っている。[39] これは単に一箇所に定位する礼拝場の有無の問題ではなく、彼らの精神の方向性の問題であろう。自然を通して神へ近づき、自然と共に神を礼拝することを好む、宇宙空間へと開かれた精神の志向性こそが、かの「ロマ書」八章の自然観に強い関心を払わせ、それを基軸とした豊かな思索を重ねさせた一因だといえる。とりわけ、矢内原が後年、夏季は長きにわたって山中湖畔に居を定め、戦時下には何十人の弟子らと当地で合宿の聖書講習会をもち、そこで早朝欠かさず湖畔にて祈禱会を行ったことなどは、自然を通して神へと近づくという、初期無教会の人々に濃厚な神礼拝、神接近の様態の最たる例だといえるだろう。[40]

若き矢内原の自然観はどうであったか。蘆花や独歩、ワーズワース、テニソンなど自然をめぐる作品を好む感性が彼に養われていた。彼にとり自然は慕わしい母であり、清さや自由や生命といった観念を担い、「実在」に触れるための生に不可欠なものと認められた。[41]

矢内原は戦中、帝大教授の職を失した（一九三七年）後は、聖書研究と西洋古典研究を日課とし、それらを若者に講義したり、その研究成果を雑誌にまとめたりした。そのような彼が「ロマ書」を集中的に講義する機会は戦前戦後を通

じて三度あったが、[42]それ以上に彼が「ロマ書」の自然観に強く結びついたのは、「山中湖聖書講習会」第六回目（一九四三年）においてである。彼はそこで、独自の観点から平和の問題、民族の和解の問題を考え、遂に全宇宙的エクレシヤ（神の国）の問題に説き至るが、その一環として「ロマ書」の自然観を「和ぎ」という地平より取り出したのである。[43]その論旨は次のようになる。

人と人とが争うこと、他人の不利益において自分の利益を得ようと考えるのは、そのものが一つしかないのに、それを得ようとする人間が二人だからである。それは土地が少なく、資源が少ないことによる（ここに経済学者矢内原の、土地や資源への分析眼が光る）。ではなぜ土地や資源が不足するのか、その根本の理由が『聖書』に記されている。すなわち「土地が呪われて土地の生産力が衰えたからである」。神は人に良いものを豊かに与えたのに、人が罪を犯したため自然もまた人の罪の呪いを蒙ったのだと「創世記」はいう。ここに人と神との和ぎの喪失が、人と自然との和ぎをも喪失させたことが告げられている。

人が病原菌や自然災害などに繰り返し脅かされるのも、実にそのように人と自然の不和を導いた人それ自身の罪が根本にある。なぜなら、もし罪の結果である死とそれに至る苦難というものがなければ、自然の脅威とされる現象はもはや脅威ではなくなるからである。

このような矢内原の思索で重要なのは、彼のいう「和ぎ」が人間社会の平面的関係だけに収まらない宇宙・自然をも含めた立体的かつ時間軸を伴う構図を持っているということである。真の和ぎの獲得は人相互の関係だけでなく、自然相互、人と自然、そしてその根本にある人と神との和解にこそあるという拡がりである。

矢内原は当時の国際情勢と正面から向き合うことにより、人と人との争いを民族間の紛争において最も典型的に見ていた。そこでは人々が自民族を守りかつ繁栄させるために、一つ所にある利益を目指して相争う現実があり、そこに彼は「自然が乏しい」という自然の資源的性質の限界を見据えている。人が神から離反することによって、自然は人に乏しく現れるだけでなく、互いの争いをかきたてる状態にまで堕ちたのである。これは人と自然がその命運を共にするよう、創造の秩序の中で並び造られたからにほかならない。

よって、人と人との和ぎは人と自然との和ぎと共に達成されなければならず、それは宇宙的な和ぎの一部分としてでなければありえないと矢内原は結論する。そしてその和ぎへの第一歩こそ、イエスの十字架への信による神への接近となる。彼によれば、人類の生活と歴史を自然との闘争

と見ることほど非キリスト教的なことはない。人類の歴史を自然との和ぎへの歩みと見ていくことこそが、キリストの福音の視座だというのである。彼はこの和ぎの宇宙的構造の根拠が「ロマ書第八章一八―二五節にある」と明言している。[44]

この「ロマ書」八章を基点とする宇宙救済のビジョンは、戦時下に神よりの平和に最後の信を置く矢内原とその共同体において、忍耐と待望の姿勢を整える思想的基盤となっていく。ここに、内村がその終末論的読解に開眼してから四半世紀の後、「ロマ書」八章の自然救済論が、戦争と平和の問題を橋渡しに、現実生活の一呼吸にまで浸透していった様子を窺うことができる。彼においては内村と同じく、自然が人々を争いと脅威に陥れる事態への目配りが甘くはなかったのであり、[45]それゆえにこそ人と自然の和解の完成を求めて、その不和の原因とされた人の罪の問題が徹底的に究明されることになったのである。

五　結びにかえて

「ロマ書」八章一八節以下の解釈は、文献学的にも聖書神学的にも多様にあり、読解者の置かれた知的系譜や境遇にも左右されるものだろう。しかし、いずれの立場に身を置くにせよ、それが神の被造物である人と自然が、連帯して救済を待望するその境地が示されているということ、そこに聖霊なる神の執り成しの働きがあるとすることは疑いえない。

日本には近代以前に既にいくつかの自然に対する近づき方や関係性の取り方、感情の持ち方の文脈が存在していたといえるが、[46]近代以降、『聖書』が普及し始めてから新たに認められたであろう、『聖書』に根を持つ自然像の一大典拠をめぐる思索の系譜が従来、思想史研究において主題的に取り上げられなかったことはむしろ不思議なことのようである。

本稿ではこの箇所を信仰の絶頂と見た内村鑑三を発端に、近代日本において「ロマ書」八章の自然観がいかに受容されたのか、その一つの水脈を探ろうと試みた。本稿ではその受容と継承の一脈の発掘と、その思索の最たるものを整理・考察することに重心を置いたため、具体的な自然物をめぐる知見や聖書読解全般についての詳細な検討にまで筆は及んでいない。本稿が明らかにしようと試みたことは、内村を始め、その後継者である藤井、三谷、矢内原の各人が、「ロマ書」八章に記された自然観を、意識や経験を超える一つの明確な啓示として受け止め、それを手がかりに宇宙全体の救済を待望したその境位である。

各人は自然への関わりを経験的に培ってきていたが、その経験は必ずしも打ち消されることなく、「ロマ書」八章の自然観の内に包摂されていったと見られる。その自然観がそれ以前の経験を包摂していくのは、それが歴史性をはらんだ壮大な宇宙救済論の一部分だからであり、感覚や意識の経験を超えた玄義の消息だったからだろう。その玄義を実存の深みにおいて、公的共同性への高い感度をもって信受したことが、彼らの自然への視線を独自に神中心的なものに造り変えていったのである。本稿で取り上げた内村以後の面々は、この宇宙救済史の視野を確保しながら、自然とともに、自然のただ中で畏れをもって神へと近づこうとした点で、日本近代の思想・宗教史に際立った足跡を残している。

注

（1）荒井献「聖書における自然観」（『宗教研究』第六九巻第一輯、日本宗教学会、一九九五年、二五―四八頁）や、大貫隆『神の国とエゴイズム――イエスの笑いと自然観』（教文館、一九九三年）、樋口進「創造と自然」（木田献一・荒井献編『聖書の思想と現代』日本基督教団出版局、一九九六年、一九―四一頁）、井上大衛「新約聖書における自然と歴史」（同上書、一七一―八八頁）などを参照。

（2）キリスト教学分野における自然をめぐる問題の布置を概観するのに有益な論稿として、芦名定道・加藤隆・佐久間勤「環境問題と救済史的視点」（『日本の神学』第三六号、日本基督教学会、一九九七年、一〇一―一一頁）、芦名定道『自然神学再考』（晃洋書房、二〇〇七年）、笠井恵二『自然的世界とキリスト教』（新教出版社、一九九九年）、間瀬啓允『エコロジーと宗教』（岩波書店、一九九六年）、安田治夫「自然の神学」（熊澤義宣・野呂芳男編『総説現代神学』日本基督教団出版局、一九九五年、二四五―六七頁）などを参照。

（3）本稿は拙論「見神と自然をめぐる思索と交錯――綱島梁川と内村鑑三」（『宗教研究』第八五巻第一輯、二〇一一年、一二五―四九頁）を受け継ぐものである。当該論文において筆者は、日本のキリスト教周辺の〈神との出会いにおける自然〉の諸相を二つの対比的事例の交渉の地平から取り出して検討した。その際『聖書』への信がひとつの重要事項として浮かび上がってきたのであるが、本論はその信に依拠した内村以後の〈神との出会いにおける自然〉の様相を、具体的な聖書箇所と時代状況に即して描出しようとするものである。

（4）この時点の内村は、明治文語訳聖書と大正七年の改訳聖書を共に参照して訳出している。訳出にあたり使用したギリシア語原典や文典、註解書などは『内村鑑三全集』

（第二刷、岩波書店、二〇〇一年。以下『全集』とのみ表示）二六巻、「解題」五七一―七二頁を参照。

（5）以上、『全集』二六巻、三〇七―一七頁の各所より筆者が引用、再構成した。

（6）『全集』二四巻、三八九頁。

（7）この読み自体は伝統的に一般的なものであるという。現代のルター派の代表的神学者アルトハウスの読み方もこれに等しい。パウル・アルトハウス著、杉山好訳『ローマ人への手紙――翻訳と註解』（ＡＴＤ・ＮＴＤ聖書註解刊行会、一九七四年）二二四頁を参照。

（8）『全集』二四巻、三八九―四〇頁。『全集』一九巻、八―九頁などを参照。

（9）同右、三八九頁。

（10）『全集』二六巻、三〇七―三二頁。

（11）『全集』三四巻、一八頁。

（12）『全集』二四巻、二一一―一二頁、『全集』二三巻、三九―四〇頁を参照。

（13）『全集』二三巻、三九―四〇頁を参照。

（14）『全集』一九巻、九頁、『全集』二四巻、二一一頁、二五巻、五四一頁などを参照。

（15）『全集』二四巻、三九〇頁。

（16）以下、内村の青少年期の歩みについては鈴木範久『内村鑑三日録1 青年の旅』（教文館、一九九八年）を参照。内村における自然の諸相については、千葉真「内村鑑三の自然観とエコロジー」（『内村鑑三研究』第三十号、キリスト教図書出版社、一九九四年、七二―九八頁）が思想研究として出色。その他参照すべきは、中沢洽樹『内村鑑三真理の証人』（キリスト教夜間講座出版部、一九七一年、三八―六〇頁）、川喜田愛郎「内村鑑三の「天然」観」（『内村鑑三研究』第二号、キリスト教図書出版社、一九七四年、一―二七頁）、鵜沼裕子「内村鑑三における神と天然」（同上、第十一号、一九七八年、七二―九〇頁）、小原信「内村鑑三における天然」（同上、第十八号、一九八二年、二九―七〇頁）など。

（17）内村による欧米、とくにアメリカの詩人の研究と紹介については亀井俊介『内村鑑三』（中公新書、一九七七年）一五五―九七頁を参照。

（18）「一九二九年一一月一一日付日記」『内村鑑三全集』三五巻、五一七頁を参照。

（19）『矢内原忠雄全集』（岩波書店、一九六三―五年）二六巻、二一一頁、大塚久雄『社会科学と信仰と』（みすず書房、一九九四年）、一九一―九二頁。内村が文学者らへ与えた影響については、鈴木範久『内村鑑三をめぐる作家たち』（玉川大学出版部、一九八〇年）を参照。

（20）『全集』一九巻、七〇頁。

（21）同右、七一頁。

(22) 「我等の希望」『全集』一九巻、八―九頁

(23) 『全集』三五巻、四八九頁。

(24) この時期の文芸・思想的背景の広がりを考慮するにあたり、鈴木貞美編『大正生命主義と現代』（河出書房新社、一九九五年）所収の諸論稿が参考になる。

(25) 『藤井武全集』（岩波書店、一九七一年）九巻、一〇巻、『矢内原忠雄全集』（岩波書店、一九六三―六五年）二七巻、二八巻収録の諸篇を参照。

(26) 近代日本において漢詩文の素養が果たした書記体系への影響や、感覚的世界把握への貢献については斎藤希史『漢文脈と近代日本』（日本放送出版協会、二〇〇七年）を参照。

(27) 一九七一年に、南原繁らにより新たな組版で再刊された全集では第三巻にあたる。

(28) 後に「沙漠は番紅花のごとく」と改題されて、単行本『沙漠は番紅花の如く』（岩波書店、一九二四年）の第五章として収録。前掲『藤井武全集』三巻、四〇二―一四頁。

(29) 『藤井武全集』三巻、四〇二頁。

(30) 「道徳としての自然」『藤井武全集』三巻、二六八―七八頁を参照。

(31) 「沙漠は番紅花のごとく」四〇五頁以下を参照。

(32) 「道徳としての自然」二八六―八七、二九一頁など。

(33) 「武蔵野の夕ぐれ」『藤井武全集』三巻、二九三頁。

(34) 「忘却来時道」『三谷隆正全集』（岩波書店、一九六五―六六年）五巻、二七八―七九頁。

(35) 『三谷隆正全集』五巻、三八九―九四頁を参照。「川西実三宛 大正五年十一月五日付封書」と「内山直宛 大正七年二月一二日付封書」の間に大きな思想転換が見られる。

(36) 以下、括弧内の引用も含め、『三谷隆正全集』五巻、六五三―五八頁。友人・高木八尺による邦訳「宇宙の祈り」（同上書、四巻、四九三―九八頁）も併せて参照。

(37) 三谷の思想の全体像については拙稿「知と信のあわい――哲人・三谷隆正における病と新生の言葉」『超域文化科学紀要』第一五号（東京大学総合文化研究科超域文化科学科専攻、二〇一〇年）一七四―九二頁を参照されたい。

(38) 矢内原忠雄の戦前・戦中の歩みについては拙稿「矢内原忠雄における戦時下共同体の成立と展開――そのエクレシヤ観との関連に注目して」『比較文学研究』第九四号（すずさわ書店、二〇一〇年）七四―九四頁を参照されたい。

(39) 前掲、千葉真論文八一―三頁、鈴木範久『内村鑑三とその時代――志賀重昂との比較』（日本基督教団出版局、一九七五年）第八章における考察なども併せて参照されたい。

(40) 矢内原忠雄『山中湖聖書講習会・講話・感想』（新地書房、一九九一年）一四〇頁―四一頁、一六一―六二頁や、

同書付録に掲載の西村秀夫「山中湖聖書講習会の特徴」を参照。

(41) 『矢内原全集』一八巻、一二五—二六、二八三、三二一七頁や二九巻、四二一—二七頁参照。

(42) 彼の「ロマ書」講義の記録は『矢内原忠雄全集』八巻にまとめて収められている。

(43) 以下、括弧内の引用も含め『山中湖聖書講習会・講話・感想』一七八—九七頁を参照。

(44) 同右、一八四頁。

(45) とくに同右、一八二—八六頁を参照。

(46) 日本の自然観については、家永三郎『日本思想史における宗教的自然観の展開』(創元社、一九四四年)、源了圓「日本人の自然観」『新・岩波講座哲学5 自然とコスモス』(岩波書店、一九八五年)三四八—七三頁、伊東俊太郎編『日本人の自然観——縄文から現代科学まで』(河出書房新社、一九九五年)、中村生雄『祭祀と供犠』(法蔵館、二〇〇一年)、斎藤正二『日本的自然観の研究』全四巻(八坂書房、二〇〇一—〇六年)、西脇良『日本人の宗教的自然観』(ミネルヴァ書房、二〇〇四年)などを参照。

(東京大学大学院)